

チャイルド・ファンド・ジャパンだより

[スマイルズ] 2018年5月NO.44

SMILES

<https://www.childfund.or.jp>



ChildFund
Japan

チャイルド・ファンド・ジャパンは、1975年より、アジアを中心に貧困の中で暮らす子どもの健やかな成長、家族と地域の自立を目指した活動をしています。

特集

スリランカ

未来にある
たくさんの選択肢

特集

スリランカ

未来にある たくさんの選択肢

チャイルド・ファンド・ジャパンは、2006年からチャイルド・ファンド・インターナショナルと協力してスリランカで支援を行っています。スリランカで支援を受けるチャイルドたちの中には、地域の特殊な理由によって、将来の可能性が狭められてしまっている子どもたちもいます。スポンサーシップ・プログラムは、未来にはたくさんの選択肢があることを子どもたちに気付いてもらい、子どもたち自身が目標を見つけ、それに向かって進んでいく手助けをしています。

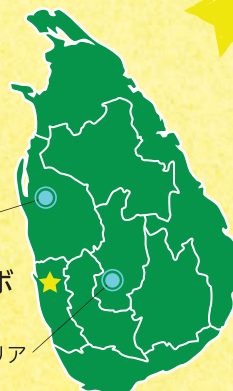
Sri Lanka

● チャイルド・ファンド・ジャパンの支援地域

プッタラム・エリア

コロンボ

ティー・プランテーション・エリア



選択肢が広がる

「栄養改善プログラムに参加してから、子どもたちがご飯をたくさん食べるようになりました」。ヌワラエリヤ県のティー・プランテーションで、自宅の前で遊ぶ子どもたちを見守りながら、ヨーギニさんは話してくれました。4歳になる息子のディバカランはスポンサーシップ・プログラムの支援を受けています。ヨーギニさんは、支援の一環として保護者を対象に

実施された栄養改善プログラムに参加したのでした。まず、研修で栄養の重要性について学び、その後、より実践的な10日間のプログラムで栄養バランスのとれた食事づくりを学びました。

「プログラムに参加したことで、料理が上手になったし栄養に関する知識も増えました。参加して一番よかったことは、身近にある食材だけで栄養豊富な食事を作る方法を学べたことです。今までは知らなかっただけで、食事を豊かにする材料はすぐに手に入れられることに気付きました。子どもたちが幸せそうにご飯を食べているのを見ると私も嬉しいです」。スリランカの貧しい地域では、成長に必要な栄養を食事から得られずに、栄養不良に陥ってしまう子どもも少なくありません。ヨーギニさんは、栄養改善プログラムに参加したあと、子どもたちに「あの料理を作って欲しい」とせがまれるようになったそうです。



自宅の前に立つヨーギニさんとチャイルドのディバカラン



ティー・プランテーションで生まれ育ったヨーギニさんは、十分な教育を受けないまま15歳の時から茶摘みの仕事を始めました。結婚して夫の住む農園に移って来たあとも茶摘みの仕事を続けています。「この子たちにはしっかり食べて、大きく成長して欲しいです。また、私のように茶摘みの仕事だけをするのではなく、未来は大きく広がっていることに気付いて欲しいと思います」。

新芽の鮮やかな緑色がまぶしいティー・プランテーションの茶畑

ティー・プランテーションの特殊性

ティー・プランテーションは、スリランカの中でも独特な文化が残っている地域です。その名前の通り、お茶の木を栽培し、紅茶を製造する広大な農園がいくつも広がっています。大きな町から離れた山の上にある農園は、そこで働く人々や家族のための住居や学校、医療施設がつくられ、生活に必要なものは敷地内で手に入れることができます。一つひとつの農園が閉鎖的な村のように存在しており、人々は農園の外に出ることに消極的です。



いつも通っている学習センターを案内してくれたナディーシャ

小学5年生、チャイルドのナディーシャは、典型的な紅茶農園の家庭に暮らしています。両親や祖父母などと7人で小さな家に住んでいます。ナディーシャは学校が終わると、スポンサーシップ・プログラムで運営されている地域の学習センターに行って、自習室で学校の宿題をします。センターには本や画材も備わっていて、ナディーシャは

読書をしたり、気に入った本の挿絵をまねて絵を描いたりすることもあります。

ナディーシャのお父さんは、紅茶農園で働いています。もう引退していますが、おじいさんも農園で同じ仕事をしていました。おじいさんに話を聞くと、自分の父親(ナディーシャのひいおじいさん)も農園で働いていたと教えてくれました。農園では、茶摘みは女性の仕事になっており、女性のほとんどが茶摘みをしています。ナディーシャのお母さんも茶摘みの仕事をしていますし、おばあさんも茶摘みをしていました。ナディーシャの一家は昔から紅茶農園の中で生活するしかない家族でした。



茶葉となる新芽を一つひとつ手摘みで収穫します

未来の可能性に気付く

ナディーシャのように、ティー・プランテーションの特殊な環境で育った子どもたちは、自分の将来についてどのように考えるのでしょうか。自分も家族と同じように、将来は農園で紅茶に関係する仕事をするのだと思うようになるのは想像に難くありません。同じ地域で支援を受けるチャイルドたちや家族に話を聞いていると、子どもたちの可能性が狭められてしまう理由は、教育の機会が限られていることだけではないと気付かされます。そもそも、将来どのような仕事をしたいかを考えたこともない子どもも少なくありません。

そのような子どもたちには、未来には多くの可能性が広がっていることを示す必要があります。親や周りの大人たちがしている仕事だけではなく、社会には様々な職業があること、自分もそれを目指せることに気付いてもらわなければいけません。子どもたちが将

来の夢を描くことができたとき、それを実現するために高等教育や職業訓練が必要となります。

スリランカのスポンサーシップ・プログラムの支援対象は0歳から24歳までとなっており、フィリピンやネパールと比べて幅広い年齢のチャイルドを支援しています。青少年期と分類される15歳から24歳のチャイルドにはキャリアガイダンスの実施や職業訓練などのプログラムを実施しています。これはスリランカの支援地域独自の文化にも対応するものです。キャリアガイダンスでは、様々な選択肢があることをチャイルドたちに示すことを目的としていますが、たとえば、ティー・プランテーション・エリアでは、必ずしも農園の外での就職を奨励しているわけではありません。農園には紅茶に関係する仕事以外にも電気技師や洋裁師など様々な職業があり、そのような選択肢もあることに気付いてもらうことが狙いです。

自分のやりたいことを見つけたアハマッド

20歳のアハマッドは、スポンサーシップ・プログラムによって自分の進路を見つけたチャイルドの1人です。トゥクトゥク(三輪タクシー)の運転手をしている父親の収入だけでは一家を支えるのに十分ではなく、生活が厳しかったため、アハマッドは8歳の時に支援を受けるようになりました。在学中にはセンターで補習を受けたり、通学カバンや文房具といった学用品の支援を受けたりすることができ、アハマッドはもちろん、妹たちを含め3人の子どもを抱えたアハマッドの両親にとっても、支援は大きな助けになったといいます。

アハマッドの人生の転機となったのは、キャリアガイダンスの一環としてコロンボ市の技術訓練校を訪れたときのことでした。技術訓練校を見学している間、学生たちがエアコンの修理技術を習っている様子がアハマッドの目に留まりました。その時までまったく視野に入っていなかったエアコンの修理という分野に強い興味を引かれたアハマッドは、この出来事をきっかけにエアコン技師を目指すことを決めました。その後、センターの支援を通じて職業訓練を受け、今では念願のエアコン技師の仕事に就いています。仕事について聞かれたアハマッドは、「今は毎日楽しんで仕事に取り組んでいます」と、静かながらも力強く話しました。

目指していた職業に就くことができ、アハマッドは前向きに仕事に取り組んでいます



リーダーシップ・トレーニングを受けた青少年期のチャイルドたち

1 ベテランスタッフの 一番嬉しかった話

どの職場にも、誰からも頼りにされるベテランのスタッフ
がいます。今回はチャイルド・ファンド・ジャパンの東京事
務所、フィリピン事務所、ネパール事務所それぞれで、
もっとも勤続年数ながい3名のベテランスタッフに、今ま
で仕事をしてきた中で一番嬉しかった話を聞きました。

東京事務所

伊藤 久平

入職したのが1990年なので、もう30年近く勤務して
いることになります。募金・広報や支援者サービスなど
を担当してきました。一番嬉しかったことと聞かれて、
真っ先に思い浮かぶ場面があります。

20年以上前、生活状況を知るためにフィリピンの西
ネグロス州に暮らすあるチャイルドの家庭を訪問したと
きのことです。サトウキビ農園で働く両親は、朝早くまだ
暗いうちから農園に出かけてしまうので、家には子ども
たちだけが残されます。チャイルドの女の子は小学4年
生で、弟が2人います。家の屋根には穴があいていて、雨
が降ったら寝る場所もない有様です。着ている服も擦れ
て破れており、弟たちはボロ布をまとっているようでし



た。栄養状態も悪く腕も足も枯れ枝のようでした。子
どもたちの朝ご飯は前日に炊いたご飯の残りとなかなか
砂糖だけで、きょうだい3人でおとなしく食べていま
した。そんな状況を目の当たりにして、私はなす術もなく
身の置き所もありませんでした。

その時、外から赤ちゃんの泣き声が聞こえてきました。
隣の家に生まれたばかりの赤ちゃんがいたのです。お母
さんが赤ちゃんを抱いて、外に出てきてくれました。今に
も崩れそうな家がならぶ貧困の中で、その赤ちゃんは光
り輝いて見えました。抱っこをさせてもらおうと生命の温
かさが伝わってきました。チャイルドたちも朝ご飯を中断し
て外に出てきました。赤ちゃんを囲んで笑顔が広がりました。
これまで仕事をしていて一番感動し、嬉しかった瞬間
でした。今でもその時を思い出すと心が温かくなります。

フィリピン事務所

ジョシー・メシナ

私はもともと、
1975年に最初に支
援を開始した協力セ
ンター1のスタッフ
だったのです。その
後、1991年にフィリ
ピン事務所に移り、
プログラムや支援者



サービスを担当してきました。地域の協力センターに新
しいスタッフが入った際に、フィリピン事務所としてのオリ
エンテーションを行う役割も担っています。スポン
サーシップ・プログラムは、結局は人です。チャイルドた
ちに直接接するセンタースタッフが成長することは、そ
のままチャイルドたちの成長につながります。数十年前
に支援を離れたチャイルドたちは今では社会で立派に
活躍している世代です。ある元チャイルドは、私が卒業し
た大学の学部長にまでなりました。チャイルドたちの成
功した話を聞くのが、私にとって一番嬉しい瞬間です。

ネパール事務所

アニタ・シュレスタ

ネパール事務所が開設された2年後の2008年から
スタッフとして働いています。プログラムや支援者サー
ビスなどを担当し、今は会計の責任者をしています。支
援事業は、現地のパートナー団体や学校関係者、地域
の人々とともに実施しているのですが、どれだけ想いを
共有できるかが事業の成果に大きく影響します。私た
ちの狙いをうまく説明できず、思い通りには理解して
もらえないこともあります。根気強く話し合いを重ねる
ことが大切だと感じています。話し合いのなかで、学校
の先生たちから子どものことを大切に考えたアイデア
が出ると嬉しく思
います。そういう時
は活動もうまくい
きます。子どもたち
だけでなく、地域
の人々の笑顔を見
られた時が、一番
嬉しい時です。



フィリピンにおける2つのセンターの 支援終了のご報告

チャイルド・ファンド・ジャパンは2018年5月をもって、フィリピン・ヌエバビスカヤ州(センター49)、
およびコタバト州(センター50)の2つのセンターで支援活動を終了します。
センター49は2003年から15年間、センター50は2004年から14年間にわたって
スポンサーシップ・プログラムによる子どもたちの支援を継続してきました。
長年にわたるスポンサーの皆さまからのご支援に心から感謝を申しあげますとともに、
センターが生み出してきた成果についてご報告いたします。

アルダースゲート・クリスチャン・チャイルド・センター(センター49)



ルソン島東北部に位置する支援地域は、少数民族なども住む僻地の農村地帯でした。15年間で3カ村の381名の子どもたちが支援を受け、小学校も卒業できない子どもが多かったこの地域で、80名の子どもがハイスクールを卒業し、11名は大学教育を終えることができました。補食プログラムや親への栄養指導により、開始当時は35%だった栄養不良の子どもが、2016年には1%まで減少しました。それぞれの村には小さな協同組合がつくられ、支援を受けるチャイルドの家庭が行う小規模ビジネスに資金提供し、家庭の収入を向上させています。こうした活動を通して子どもたちや地域の人々は、自分たちの生活を向上させるための意識を育み、具体的な成果をあげてきました。

◀ 補食プログラム実施の様子

チルドレンズ・エデュケーション・アンド・ウェルフェア・アシスタンス・センター(センター50)

ミンダナオ島中部の農村地域であるカライサン村を中心に、14年間で258名の子どもたちやその家族が支援を受けました。水道やトイレなどの生活インフラが乏しく、医療サービスや教育サービスが届きにくいこの村で、センターは水の設備を建設したり、保健所のサービスが届くように仲介するなどして衛生環境を整えました。結核にかかった親や子どもたちの治療を行い、補食プログラムや栄養指導、寄生虫の駆除により子どもたちが健康で学校に通える環境を整えてきました。その結果、小学校への就学率が改善され、同時に補習の実施などにより85%の子どもが80点以上の成績をあげられるようになりました。ハイスクールへ進学できる子どもも増え、早期婚で教育の機会を失う子どもも減りました。16名が大学を卒業することができま

した。教育を終えた子どもたちは就労の機会が増え、家族への収入向上訓練の成果もあって、支援を受ける家庭の平均収入は支援開始当初のおよそ4倍に増えています。

▼ 手の洗い方の指導を受けるチャイルドたち



フィリピンではこの2つのセンターへの支援終結後も、
11カ所のセンターで子どもたちへの支援を継続しています。子どもたちの未来を開く
支援のために、今後とも皆さまからの温かいご支援をお願い申し上げます。

ネパール ラメチャップ郡における 支援終了のご報告

チャイルド・ファンド・ジャパンは2018年3月をもって、ネパールのラメチャップ郡における支援活動を終了しました。2010年4月から8年間にわたって実施した支援事業の成果をご報告いたします。また、支援を受けて立派に成長したリンマヤのストーリーもご紹介します。

チャイルド・ファンド・ジャパンは2010年4月、すべての子どもたちが学校に通える環境を整えることを目標として掲げ、ラメチャップ郡におけるスポンサーシップ・プログラムを開始しました。現地のNGOであるRBPW(ラメチャップ・ビジネス&プロフェッショナル・ウィメン)と協働して、これまでに378名のチャイルドを支援しました。

支援の成果は、子どもたちの変化に表れています。出席率や進級率などの学業指標が目に見えて改善されました。また、支援開始当初は0名だった修了認定試験(SLC)の合格者も徐々に増加し、累計140名のチャイルドがこの難関試験に合格しました。「教育によって自分の人生を変え

ることができる」と子どもたちが気付くようになった」と現地スタッフが話しているように、子どもたちの意識も前向きに変わりました。また、家族や地域の人々を対象にした取り組みも行い、児童労働や早期婚についての理解が深まるなど、着実な変化が見られています。

チャイルド・ファンド・ジャパンとRBPWはこのような成果をもって当初の目的を達成したと評価し、支援の終了に合意しました。支援終了時に在学しているチャイルドには、今後の学業に支障がないように学用品の支給などの支援を行いました。また、経済的支援が必要な家庭には、家畜の支給など生活面でのサポートを行いました。

リンマヤの ストーリー



2010年の支援開始当初、子どもたちの生活環境を紹介するため機関紙などで取りあげたリンマヤという女の子がいます。当時10歳だったリンマヤは、地域の他の子どもたちと同じように厳しい生活を強いられていました。両親を助けるためにたくさんのお手伝いをしながらも、一生けんめい勉強していました。

2017年、リンマヤは17歳になり、当時の面影を残しながらも立派に成長していました。支援によって勉強を続け、無事、修了認定試験(SLC)に合格しました。地域の生活改善における農業の大切さを知り、「農業の専門家になるための勉強を続けたい」と話します。「スポンサーさんの名前はずっと忘れません。手紙をもらってとても嬉しかったです。ありがとうございました」。リンマヤは、ご支援によって未来を切り開いたチャイルドの一人です。



ラメチャップ郡での支援終了後も、チャイルド・ファンド・ジャパンはネパール大地震で甚大な被害を受けたシンドゥパルチョーク郡での支援を継続して行います。引き続きネパールの子どもたちをご支援くださいますよう、心よりお願いいたします。

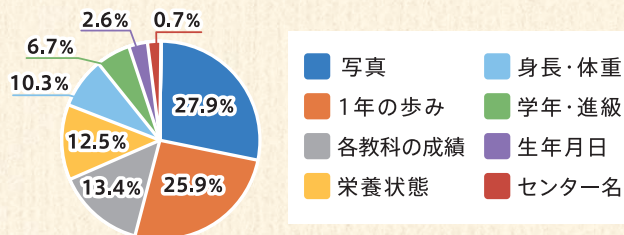
アンケートへのご協力、ありがとうございました!

昨年、フィリピンとネパールのチャイルドの成長記録について、スポンサーの皆さまにアンケートへのご協力をお願いいたしました。ご回答いただいた結果の一部をご報告いたします。

フィリピン

成長記録の項目の中では、多くの方がチャイルドの「写真」と成長の様子をご報告した「1年間のあゆみ (Remarks)」にご関心をお持ちであるということがわかりました。また、フィリピンの教育制度が変わったことにより履修科目が増えたため、記載する科目を減らして表示を簡素化することについては、賛成46%、反対4%と肯定的なご意見の多い結果となりました。今後、レイアウトなどを変更していく予定です。

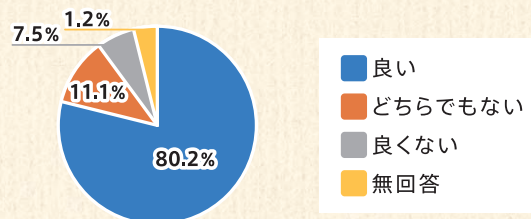
質問 ご関心のある項目をお選びください。



ネパール

2016年4月からスポンサーシップ・プログラムを開始した、シンドゥパルチョーク郡に暮らすチャイルドたちの成長記録について、チャイルドが通う学校や教室の写真を掲載するなど、従来のものから記載内容を大幅に変更しました。新しくなった成長記録については、80%の方が「良い」とご回答くださいました。「簡潔で見やすい」と好評いただく一方で、以前に比べると掲載している情報が少なくなったと感じた方もいらっしゃいました。今後は成長記録に地域の活動報告を添付することなど、内容を充実させていく予定です。

質問 新しくなった成長記録はいかがでしたか?



スポンサーの皆さまが毎年楽しみにお待ちくださっているチャイルドの成長記録は、いただいたご意見・ご感想をもとに、今後も改善を重ねてまいります。

インフォメーション コーナー

お知らせ パス・イット・バックの新しい動画を公開しました!

「パス・イット・バック～ラグビーで子どもの成長を支えるプロジェクト～」に参加したフィリピンの若者や子どもたちから、プロジェクトの感想が届きました。

子どもたちは、昨年8月のラグビー競技大会で、日本代表選手として活躍したラグビー指導者や、現役の女子選手たちのプレーを間近で見ただけでなく、交流ができたことがとても印象に残っているようです。若者コーチたちにとっては、新しいスキルを学び、子ども選手たちの手本となりながら選手への指導をやり遂げたことが大きな自信へとつながり、前向きな姿勢を持てるようになったことがわかりました。参加者の感想は動画にまとめられています。若者や子どもたちの声で語られるコメントをぜひご覧ください!

YouTubeで検索!

お知らせ 今年は支援を離れるチャイルドが大勢います!

フィリピンでは「K to 12」という新しい教育制度が導入され、ハイスクールの期間が2年間延長されました。以前の制度だったら卒業していたチャイルドがシニアハイスクールに進学していたため、2016年と2017年は卒業するチャイルドはいませんでした。今年2018年5月には3年ぶりに、多くのチャイルドがハイスクールの卒業によって支援を離れます。また、協力センター49、50の自立によって支援を離れるチャイルドもいます。

該当するチャイルドをご支援くださるスポンサーの皆さまにはハガキにてお知らせいたしました。皆さまのご支援に心から感謝申し上げます。まだまだ支援を必要とするチャイルドが大勢います。引き続きチャイルドをご支援くださいますよう、お願いいたします。

Ch^{id}Fund
Japan

Vision Mission

チャイルド・ファンド・ジャパンは
ここに掲げるビジョン(目標)、ミッション(使命)に
基づいて活動します。

ビジョン(目標)

すべての子どもに
開かれた未来を約束する
国際社会の形成

ミッション(使命)

生かし生かされる
国際協力を通じて
子どもの権利を守る

チャイルド・ファンド・アライアンス

Ch^{id}Fund
Alliance

人種、宗教、性別、国籍を問わず世界の子どもたちに、効果的な支援活動をするためのネットワークで、子どもたちに向けたスポンサーシップ・プログラムを行う11団体から構成されています。チャイルド・ファンド・ジャパンは2005年4月に加盟しました。

スマイルズ
＜チャイルド・ファンドだより SMILES＞ 2018年5月発行
特定非営利活動法人チャイルド・ファンド・ジャパン
〒167-0041 東京都杉並区善福寺2-17-5
理事長／高田和彦 事務局長／武田勝彦
TEL. 03-3399-8123 FAX. 03-3399-0730
E-mail: childfund@childfund.or.jp
URL: https://www.childfund.or.jp/

〈デザイン〉
モステデザイン研究所
〈印刷〉
有限会社東西印刷

